市政ルポ

甲賀市（こうかし）

（滋賀県）

市民力＋市役所力でめざすオンリーワンのまち!!
目標は若者・子育て世代から選ばれるまちの実現

市制施行20周年記念式典（令和6年9月29日／あいこうか市民ホール）のオープニング

最先端の薬業と情報受発信は地域の伝統・忍者の里の多彩な顔

滋賀県の東南部に位置し、三重県との県境・鈴鹿山脈西麓の丘陵地帯に展開する甲賀市は、平成16（2004）年10月1日に旧甲賀郡5町（水口町、土山町、甲賀町、甲南町、信楽町）の合併により、市制施行を実施した。

市域の面積は滋賀県の約12%を占める481・62㎢。本年1月末現在の人口は8万7628人。昨年（令和6年）10月1日には、市制施行20周年の節目を迎え、同年度を通じて各種の記念イベントが開催された。

甲賀市といえば周知のように、隣接する三重県伊賀市と共に《忍者の里》として古くから知られてきた。甲賀市と伊賀市は平成29（2017）年、「忍びの里 伊賀・甲賀――リアル忍者を求めて――」のタイトルの下、地域の特徴的な歴史が「日本遺産」にも認定されている。

《忍者の里・甲賀》の知名度は、近年、テレビドラマや映画などを通じ再び訪れつつある「忍者ブーム」などとも相まって、より一層に高まり、外国人観光客の間でも「一度は訪ねてみたいまちの一つ」として、人気を博している。

しかし、現代の甲賀市は、いうまでもなく《忍者の里》の一言ではとうてい括ることのできない、多様性に満ちた都市である。

広大な市域（全国1741市区町村の上位218位）には、例えば、日本六古窯の一つ『信楽焼』の里として知られる信楽地域がある。信楽地域には、奈良時代の西暦743～745年に、聖武天皇が「紫香楽宮」を造営したという来歴もある。

土山地域と水口地域は、市域を横断する旧東海道（五十三次）の49番目の「土山宿」および50番目の「水口宿」が近世に形成され、繁栄した。特に水口宿は旧水口藩の城下町としても栄え、甲賀市となった現在も市役所本庁舎が置かれるなど、水口地域は甲賀市の中心地域としての役割を担っている。

甲賀地域と甲南地域は《忍者の里》としての中心的なエリアだ。甲賀地域には観光施設「甲賀の里忍術村」が、甲南地域には「甲賀

岩永裕貴（いわながひろき）甲賀市長

流リアル忍者館」や「甲賀流忍術屋敷」などがあり、《忍者の里・甲賀》の観光拠点施設となっている。

毎年開催される「甲賀流忍者検定」。合格すると晴れて「甲賀流忍者」の称号が与えられる

観光インフォメーションセンター「甲賀流リアル忍者館」は豊富な歴史資料の展示のほか、各種イベントでにぎわう

また、このエリアでかつて「忍者」とされた人々は、日常的には農耕などに従事するほか、伝来の化学的知識を生かした地場産業の製薬業および売薬業を担う存在でもあった。

現代の甲賀市には国道1号が市域東西を横断し、国道307号が市域を南北に縦断しているほか、平成20（2008）年に新名神高速道路が開通すると同時に三つのICが供用開始となった。

外国人観光客にも大人気の民間施設「甲賀の里忍術村」では年間を通じ多彩なイベントが開催される（写真は水蜘蛛体験）

また、JR草津線、近江鉄道本線、信楽高原鐵道の三つの鉄道が市域を走っている。三つの鉄道路線が市域内に保有する鉄道駅は総計14駅にものぼる。中でも信楽駅をはじめ全6駅が甲賀市内に立地する信楽高原鐵道は、甲賀市が「第三種鉄道事業者」として鉄道施設を保有・管理し、運行は第二種鉄道事業者・信楽高原鐵道株式会社が行う「公有民営方式（上下分離方式）」をとっているのが特徴的だ。

さらに将来的な展望としては、リニア中央新幹線の新駅設置が甲賀市と隣接する三重県亀山市内で、名神名阪連絡道路の整備が市域内で予定されるなど、交通の要衝としての甲賀市の重要性は、今後、さらに高まっていくことが予測されている。

「交通の要衝と製薬・売薬産業が盛んなことは、近世以前からの甲賀市の大きな特徴です。甲賀市には現在も、製薬会社が甲賀地域に7社、水口地域に3社、土山地域に1社、それぞれ立地しています。

昔日の忍者たちは、鉄砲なども自在に扱った関係から、弾薬や爆薬などの自家製造や研究を通じ、最先端の化学的知識を持っていた人々でもあったとされています。

また、薬売りの人々は、東海道を拠点に、各地に四通八達した街道を活用して薬を売り歩くかたわら、全国各地の大名たちからの依頼を受けた情報収集事業を行っていた、ともされています。

つまり、かつての甲賀市エリアは、最先端の化学と情報の受発信を地域の特色として持ち、それぞれの分野で非常に先端的な役割を果たしていた地だった、とすることができるでしょう」

そう語るのは、岩永裕貴甲賀市長だ。甲賀市信楽町に生まれた岩永市長は、アメリカ・カンザス州のウィチタ州立大学（国際政治学専攻）を卒業後、農林水産大臣秘書官、衆議院議員を歴任し、平成28（2016）年10月16日に実施された、甲賀市長選に出馬して当選。本年で3期9年目を迎えている。

暮らし良いまちを支える市民力
キーワードは四つ目の縁

昨年（令和6／2024年）10月に、自身の市政・3期目のスタートと、市制施行20周年の節目とが重なった岩永市長は、本年3月の市議会定例会における《令和7年度施政方針》で「令和7年度は市制施行20周年の節目を迎えた本市が次の20年に向けた最初の第一歩を踏み出す年度であり、同時に第2次甲賀市総合計画の第3期基本計画がスタートする極めて重要な1年にあたる」と強調した。さらに「若者や子育て世代を中心とした本市の将来を担う人々から『選ばれるまち』の構築に向け、創意工夫と柔軟な発想によって課題解決を図っていく」旨、改めて決意を述べている。

「現実的な問題として、人口減少は避けられない未来ですが、地域のアイデンティティや誇り、脈々と受け継がれてきた歴史、文化・芸術などの『甲賀らしさ』をバックボーンに、質の高い暮らしが生み出す経済的・時間的ゆとり、すなわち『暮らしの余白』をアートや旅、食、学び、音楽、スポーツ、ボランティア、地域活動など、市民一人一人の『叶えたいライフスタイル』で埋めていく暮らし方を、『甲賀スタイル』として磨き上げていきたいと思います。

その背景として、城下町、宿場町、忍者、お茶、薬、信楽焼など、豊かな自然環境や歴史に育まれた地域財産や特性が甲賀市には豊富にあります。したがって、歴史文化が日常に溶け込んだライフスタイルの実現にも、とても適していると考えております」（岩永市長）

そうした「暮らしの余白」を生み出すことができるだけの経済的基盤も、実際、甲賀市にはある。例えば、前述した薬品産業や信楽焼、茶（生産量は滋賀県トップ）などの伝統産業のほか、大阪や名古屋に近い交通の要衝ぶりを基盤に、甲賀市には12カ所もの工業団地が集積（滋賀県内の工業団地は総計72カ所）している。製造品出荷額は、平成18（2006）年度からずっと県内第1位だ。

滋賀県の県内総生産に占める製造業の割合は令和6年の段階で44％弱。全国平均が20％強の状況下、はるか上をいく「ものづくり県・滋賀」にあって、甲賀市はまさに中軸、けん引役なのだ。

「さらに次の20年後の将来を見据えた、未来につなげる投資としては、名神名阪連絡道路の整備、JR草津線沿線の住宅整備、新名神高速道路沿線の工業団地や商業施設の受け皿となる土地の整備、JR草津線と

3代将軍・徳川家光が上洛（寛永11／1634年）の際に宿館として築城された水口城跡（水口城資料館併設）

東海道水口宿の街道沿いに設置された交流施設「甲賀市ひと・まち街道交流館」は水口宿の歴史文化、観光情報の発信拠点でもある

400年以上もの歴史を持つ甲賀市の「かんぴょう」づくり。その過程で行われる「かんぴょう干し」は初夏の風物詩

甲賀市

（滋賀県）

市政ルポ

製薬業は甲賀市が誇る伝統産業。「くすり学習館」では配置売薬で栄えた昔日の歴史から現代における人と薬の関わりなどを学べる

信楽高原鐵道・近江鉄道本線が結節する貴生川駅周辺の再開発など、地域が発展するために不可欠なプロジェクトへの投資を進めていきます。これらのプロジェクトは、あるいは、私の在任中に形になるものばかりではないかもしれません。しかし、甲賀市の未来には必要なプロジェクトばかりです。今のうちに種をまくことが、甲賀市の将来の発展のための大きな糧となることを信じ、積極的に進めていくつもりです」（岩永市長）

こうした未来への投資は「福祉や教育の充実をさらに継続的に図っていく上でも必要なプロジェクト」（岩永市長）であり、市民に「暮らしの余白」を継続的に醸成するための糧ともなるはずだ。

そして、この「暮らしの余白」を埋めるためのキーワードの一つに岩永市長が挙げるのは、近年話題になりつつある「第四の縁」だ。

人には生きていく上で欠かせない「社会との関わり（各種の縁）」がある。家族・親類同士の関わりによる「血縁」。暮らしている地域における、周囲の人々との関わりによる「地縁」。同じ会社や仕事などを通じた関わりによる「社縁」。この三つの縁が醸成する「人と人との関わり合い、つながり」が、かつては強い絆を生じさせ、社会生活上のゆるやかなセーフティネットの役割をも果たしていた。

例えば社会制度の保護網から漏れてしまうような境遇にある人々も、三つの縁が複合的にもたらす自然発生的なセーフティネットによって、なんとか保護されるような仕組みが成立していたのだ。

ところが社会環境の急速な変化の訪れにつれ、そうしたセーフティネットの保護機能が、現在では弱まりつつある。

「その結果として、社会のさまざまな制度上の保護網からはみ出る人々が、急速に増えるようになりました。障がいを持つ人、引きこもりになる人、若くして家族の重荷を背負わされるヤングケアラー、不登校の生徒・児童、身寄りのない独居高齢者など、支援が必要なのに支援が満足に得られない層の人々が、急速に増えたのです。

加えて甲賀市には、ものづくり産業を中心に、介護職などにも従事する外国人市民が、令和6年末の段階で4741人（人口の5・4％）います。こうした外国人市民のケアについては、県内初となる多文化共生センターを令和6年5月に開設し、外国人市民の暮らしを支えるための相談窓口を設けると共に、日本語教室、子どもの学習支援の実施などを軸に、いつまでも住み続けていただくための支援を、甲賀市国際交流協会と連携し、実施しております。

SDGsの基本理念にもある『誰ひとり取り残さない』社会の構築には、こうした保護網から漏れがちな人々への目配り、気配りの利いた市政運営を実施する『市役所力』の向上と共に、市政に積極的に連携、共に推進

13世紀半ばに始まった伝統的工芸品・信楽焼の情報発信基地「信楽伝統産業館」と信楽名物・タヌキの置物

式典と同時開催「市制20周年記念イベント／コウカEXPO 2024」（甲賀市まちづくり活動センター「まるーむ」にて）

してくださる『市民力』の育成が不可欠です。

　その市民力の育成、向上に最適なのが、先ほど申し上げた『暮らしの余白』を埋めるのにも有効なサークルや趣味の会、ボランティアグループなど、多様な市民活動の活性化です。さらに、市民力の活性化、市役所力と市民力との連携から生まれてくるのが、『四つ目の縁』として位置づけられ、新たなセーフティネットともいうべきゆるやかな知り合い関係の環、すなわち『知縁』の醸成なのです。

　そこで私が市長に就任してすぐ企画した施策の一つが、あらゆる立場の市民が気軽に集まり、つながることのできる交流施設の設置でした。具体的には1期目の令和元（2019）年5月に完成した甲賀市まちづくり活動センター『まるーむ』であり、昨年（令和6年）5月にオープンした、多文化共生センターなどを含む『みなくるプラザ』です」（岩永市長）

誰ひとり取り残さないまちづくりで めざす現代のリアル甲賀

　『まるーむ』を訪れたのは、平日の午前9時過ぎだった。利用者の多い午後から夕方にかけての時間帯でないため、比較的空いてはいたものの、試験勉強中と思われる若者たちが、静かに1階交流スペースのテーブルに向かっていた。ロビー奥の遊具が設置されたキッズスペースでは数組の親子連れが、やはり静かに遊んでいた。

　利用目的の違う人同士が、互いを尊重し合いながら、無理なく一緒に過ごしている様子は、とても印象的だった。

　交流スペースやキッズスペース以外にも、1階には授乳室を含むベビーケアルームやキッチンスペース（調理台2台、定員10名）、各種練習室（定員40名）、二つの和室（定員36名）、会議室（定員18名）、印刷作業室などが備わっている。2階には二つの多目的室（定員総計150名）、活動室（定員24名）、テラスなどがあり、1階2階ともトイレを含め全てにバリアフリー工事が施されている。

　『みなくるプラザ』も施設名の通り、誰も（みな）が思い立ったときに、自由に来られる交流施設だ。公民館（水口町地区）を中心に、多文化共生センター、コミュニティセンター、自治振興会、少年センター（保護司常駐）など、多彩な機能の施設を備えている。『まるーむ』と同様、子どもから高齢者までの幅広い世代が気軽に集まり、利用することで、個々の市民同士、さまざまなサークルや趣味の会、ボランティアグループなどが自然に交流できる場であることを目指している。

　『みなくるプラザ』で特徴的なのは、建物の造りだ。水口城跡がすぐ近くにあるせいだろうか。『まるーむ』が現代的なモダンデザインだったのに対し、『みなくるプラザ』

「みんなの居場所」のキャッチフレーズ通り、市民団体から小中高校生に至るまで、市民が集い交流する甲賀市まちづくり活動センター「まるーむ」

公民館、多文化共生センター、コミュニティセンターなど多彩な機能を併せ持つ「みなくるプラザ」は市民協働の拠点施設

はまるで城内に築かれた長屋や離れなどのような塩梅の平屋の連なり（内部はもちろんモダンな造り）で、前出の各施設のほか、研修室、活動室、集会室など多様な機能を持つ部屋が、平面的につながっているのだ。

「甲賀市の最大の地域課題は、全国の都市に共通する人口減少の抑制と少子高齢化対策です。先ほども申し上げましたように、人口減少は避けられない未来ですが、甲賀市では令和7年度から開始の『第2次甲賀市総合計画・第3期基本計画』に基づく各種の地域活性化施策の推進などにより、令和10（2028）年度の人口フレームを、8万7000人としています。

このフレームをベースとして、若者・子育て世代に選ばれるまちづくりを推進していく必要があります。先ほど申し上げた甲賀市民の「暮らしの余白」を醸成し、一人一人の市民がそれを、自分の『叶えたいライフスタイル』で埋めていける『甲賀スタイル』の磨き上げは、そうした若者・子育て世代の方たちにこそ、魅力を一層感じていただける要素になるものと信じております」（岩永市長）

既に暮らしている若者・子育て世代だけでなく、人口減少を無理なく抑制していくにはもちろん、今はよそのまちに暮らしている若者・子育て世代にも、「いつか甲賀市で暮らしてみたい」と思ってもらえる施策の推進が不可欠だ。具体的には積極的なシティプロモーションと、観光振興の推進による交流人口の増大化が重要となる。

折しも本年は、4月から10月にかけて『大阪・関西万博（2025年日本国際博覧会）』が開催される。国内外から多数の観光客が訪れるはずの大阪から甲賀市までは、鉄道利用で90分以内の近距離だ。国内外から多くの観光交流人口が甲賀市を訪れることも予測される（※取材は本年1月24日）。

その際には、日本遺産認定の「忍び（忍者）の里」や、「日本六古窯」でタヌキの置物でも知られる信楽焼の里など、世界的にも類を見ない特徴的で多様な地域財産の数々が、訪問者たちの心を強く捉えることだろう。

もちろん、観光交流人口の一時的な増加を、継続的な移住・定住人口の増加につなげていくのは、容易ではない。しかし、甲賀市においては、これまで述べてきたように、地道な市民活動の活性化を推進力に、あらゆる立場の市民と市民のつながり（絆）の強化による「四つ目の縁」の醸成を基盤に、誰もが住みたくなるまち、住み続けていきたいまちの構築が、多彩に進められつつある。

かつての《忍者の里・甲賀》のリアル像は、化学と情報受発信の最先端地区だった。「第四の縁」などが醸成する新たな絆を基盤に、近未来に向けて「市民力」と「市役所力」が育んでいく「甲賀流・誰もが住み続けたいまち」のリアル像は、いったいどんな都市像を結実化していくのだろうか。その日の到来が待ち遠しい。

（取材・文＝遠藤隆／取材日＝令和7年1月24日）

水口神社の例大祭の目玉として約300年前から続く「水口曳山祭」。主役の曳山は水口町内に16基現存